

トマト・ミニトマトの白絹病（新発生）

令和6年7月、日高管内の牧草地跡の新規ハウスで、ミニトマト（品種「キャロル10」）に下位葉から上位葉にかけて葉が萎れる症状が発生した。発病株は地際の茎表面に黒褐色の病斑が認められ、病斑と周囲の地表面に白色絹糸状のかびを生じて、白色～褐色のけし粒状の菌核を多数形成した。病斑部から分離された糸状菌は、5～10mmの白色の菌糸にかすがい連結を有し、菌糸表面に1mm程度の球形の菌核を形成した。分離株をトマトに接種したところ地際の黒褐色の病徴と萎凋症状が再現されたことから、*Sclerotium rolfsii* Saccardoによるトマト白絹病と同定した。

本菌は菌糸や菌核の形で罹病残さとともに土壤中で残存して第一次伝染源となり、土壌中や土壌表面に未分解有機物があると発生しやすい。高温で湿った土壌条件を好み、ナス科、ウリ科、アブラナ科、マメ科など多くの作物を侵す。好気性の菌であるため、湛水状態では数カ月で死滅する。

（中央農試・日高農業改良普及センター）



トマトの白絹病（中央農試 野津原図）